

国際文化交流特論： 越境する宗教とその可能性

第8回：

日本の新らしい宗教とキリスト教

名古屋大学
鈴木繁夫（名誉教授）

日本宗教の変化

1970年代以前	1980年以降
物質的不幸の克服	むなしさの克服
貧(創価学会)	現世離脱
病(生長の家)	神秘体験と自己責任
争(立正佼成会)	世界破局

麻原 シャクティーパット

日本の政治と宗教

- 創価学会
 - 公明党の母体組織
 - 党員は創価学会会員

- 安倍政権
 - 閣僚たちは日本会議メンバー
 - 日本会議: 「日本青年協議会」生長の家学生運動
 - 霊友会、崇教真光

創価学会 文化会館



新宗教の視点

(1) 貧困からの脱出

(2) 病気の治癒

1980年代新々宗教の視点

(1)「絶対的な私」の発見

(2)死の意味

麻原：＜見えない世界＞への誘い



麻原：エネルギー注入

- 1987年放映

麻原のメッセージ

- 人は死ぬ、必ず死ぬ。絶対死ぬ。死は避けられない。死を前にして、恋愛が有効だろうか。死を前にして、物質が有効であろうか。死を前にして、お金持ちになることが有効であろうか。死を前にして、権力を得ることが有効であろうか。一切無効である。
- 死を前に、何が有効だろうか。それは大いに徳を積み、そして戒律を守り、五感を制御し、深い意識状態に入り、死を知り、死を克服することである。
- (オウム真理教『真理の芽』1997年)

1980年代新々宗教の目的

- 日本での＜仏教＞
 - 個人が＜見えない世界＞に直接触れる
 - 超能力・神秘体験の重視

超能力・神秘体験

又ミノーゼ

(1) 畏怖の念:

- 身震いを伴う、ひれ伏したくなるような感情



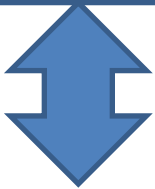
(2) 魅了

- 限りなく心が引かれてしまう

オットー『聖なるもの』



二種類の問い

- 根源的な問い
 - どこから来て、何者で、どこへ行くのか
 - 超越的な視点をもつ人間 homo religiosus
- 
- レクサスの問い
 - 効率的で、評価に値するか
 - 自立した強い個人像 homo mentis

新々宗教自体の墮落

- 自力修行(禁欲)→インスタント解脱法
 - 機械・薬物による覚醒
- 精神的共同体→宗教自治区
 - 国家型経営(組織＋防衛力)
 - 真理国基本律

新々宗教の罭：個人的思考放棄

- 絶対的なものに帰依
 - － 精神的問題の棚上げ
 - 自分の位置付け、やるべきこと、目標が明快



<私> は<自分> について悩まない



依存・寄生のポピュリズム (<大衆>)

参考文献

- 上田紀行『宗教クライシス』
- 佐藤優 (2016)『資本主義の極意：明治維新から世界恐慌へ』
— (2009)『はじめての宗教論』
- 島田裕巳 (2001)『オウム：なぜ宗教はテロリズムを生んだのか』
- 吉田司『新宗教の精神構造』
- 村上春樹『アンダーグラウンド』